

41865

教科書文庫

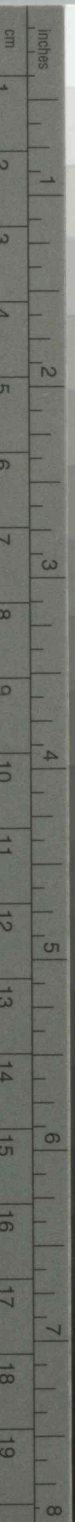
4
815
41-1935
20000 41359

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



31759
Y019
資料室

心修 中學新文典 上級用

文學博士吉田義則著

教科 41 200



文部省檢定濟

昭和十年十二月十一日 中國語文教科用

教科書文庫
4
815
41-1935
2000041359

資料室

375.9
Y019

修正



中

學

新

文典

上級用

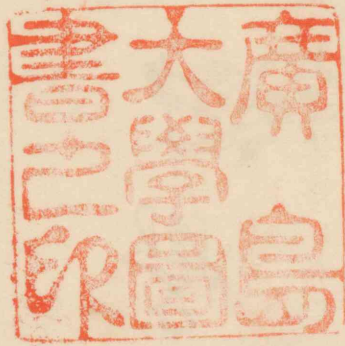
修正
岩崎武人



修文館發行

広島大学図書

2000041359



例言

- 一 本書は中學校高學年に於ける國文法教科書に充てんがため、改正中學校教授要目に準據して編纂せるものなり。
- 一 本書は拙著「新語法」「新制中學文典」との連絡は勿論、現行第一學年用文法教科書との連絡を考慮し、既習の全事項を組織的に整理し、進ずて文の構成に對する一般の智識を授くるやう編纂したり。
- 一 本書はなるべく煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へ、學習者をして容易に國文法の一般的智識を了得せしめ、讀書に、作文に直に之を應用せしめんことに力を用ひたり。

- 一 國文法中、最も至難とせらるゝ助動詞及び助詞の意義用法、并に動詞と助動詞、及び助動詞相互の接續等については特に意を用ひて説明したり。
- 一 文例并に練習問題は文學的趣味の豊かにして、且つ成るべく生徒の實生活に緊密なるものを選び、文法の學習に興味あらしめんことに力めたり。

昭和八年九月

著者識す

修正に當りて

- 一 第一章に品詞を總括したり。
- 二 口語形容詞活用の説明を修正したり。
- 三 文章篇第一章文の成分の説明中一部を修正したり。

昭和十年八月

著者識す

第七章	音便	三
第八章	副詞	五
第九章	接續詞	七
第十章	感動詞	六
第十一章	助動詞	元
一	文語助動詞の種類及び活用	元
二	口語助動詞の種類及び活用	四〇
第十二章	動詞と助動詞との接續	四
一	文語動詞と文語助動詞との接續	四
二	口語動詞と口語助動詞との接續	四
第十三章	助詞の用法	五
第十四章	品詞の轉成	五
第十五章	紛れ易い品詞	七

文章篇

第一章	文の成分	六
第二章	文の成分の位置と省略	六
第三章	句及び節	一〇
第四章	文の構造上の種類	一〇
第五章	文の性質上の種類	一〇

表

第一表	文語動詞活用表
	口語動詞活用表
第二表	文語形容詞活用表
	口語形容詞活用表
第三表	文語助動詞活用表
第四表	口語助動詞活用表

- 第五表 文語動詞助動詞接続法
- 第六表 口語動詞助動詞接続法
- 第七表 文語接続助詞と動詞形容詞との接続法

目次終



正修 中學新文典 上級用

文學博士 吉澤義則 著

單語篇

第一章 單語・品詞

一 單語

單語とは、言語の最小單位を表はす名稱である。即ち海・山(名詞)、僕・これ(代名詞)、二つ・一番數詞、咲く・讀む(動詞)、高し・美し(形容詞)、べし・らる(助動詞)だに・まで(助詞)等は皆單語である。

二 品詞

品詞

單語をその意味・職能・形態の上から、これを左の十の種類に分ける。これを品詞といふ。

名詞
事物の名稱を表はす品詞

一名詞

花 鳥
勤勉 幸福
楠正成 日本

數詞
數量又は順序を表はす品詞

二數詞

一つ 五圓
十番 第二回
(數量)
(順序)

代名詞
名詞の代りに用ひられる品詞

三代名詞

私 あなた 彼
これ それ あれ
こゝ そこ かしこ
こなた そなた あなた
(一人)
(事物)
(場所)
(方向)

動詞
事物の動作及び存在を表はす品詞

四動詞

讀む 書く
あり 居り

形容詞
事物の性質有様を表はす品詞

五形容詞

羨し 勇まし
赤し 低し

副詞
動詞・形容詞・副詞の意義を限定する品詞

六副詞

甚だ いよく
早く 高く

接續詞
上下の語句文章を接續する品詞

七接續詞

或は 又
されば それに

感動詞
感動した時に發する品詞

八感動詞

あゝ あはれ
いで いざ

助動詞
おもに動詞に添うてその意味を助ける品詞

九助動詞

むかし
らし たし

助詞

種々の語の下につ
いてその語と他語
との關係を示す
練習一

〇 助詞

を も
さへ すら

練習

一 次の文を各品詞に分類せよ。

- (イ) 歲月流るる如し。分陰を惜みて勉強せざるべからず。
- (ロ) 下駄の音が聞える。弟が歸つたらしい。
- (ハ) 帆を半ば張りて漕ぎ行く舟あり、櫓を操りて横ぎる舟あり。
- (ニ) 深呼吸又は冷水摩擦を行ひ、且つ適當に運動する時は大いに健康を増進すべし。
- (ホ) 世の學問に志す者は、とかく低いところを経ないで、すぐに高いところへ登らうとする弊がある。それでは低いところにさへ届くことも出来ない。

名詞

普通名詞

固有名詞

練習二

第二章 名詞

名詞の種類

一 普通名詞

「國」「豪傑」などのやうに、同種類の何れの事物にも通じて用ひられる名稱を表はす名詞を普通名詞といふ。

二 固有名詞

「日本」「西郷隆盛」などのやうに、一つの事物に限つて用ひられる名稱を表はす名詞を固有名詞といふ。

練習

一次の文中から名詞を擇び出し、その中いづれが固有名詞なるかを答へよ。

數詞

數量を表はす數詞

順序を表はす數詞

- (イ) 一切經は佛敎に關する書籍を集めた叢書である
- (ロ) 春來れば雪消の澤に袖たれてまだうら若き若菜をぞ摘む
- (ハ) 欽明天皇の朝百濟より佛像及び經論を獻す
- (ニ) エヂソンは米國の人だが世界の恩人だ
- (ホ) 源氏物語は紫式部の書いた有名な小説である

第三章 數 詞

一 數詞の種類

一 數量を表はす數詞

- (イ) 一を聞いて十を知る。
 - (ロ) 鉛筆一ダースの價五拾錢なり。
- 二 順序を表はす數詞

練習三

練習

- (イ) 太郎は三の組の第二番なり。
 - (ロ) あの角から三軒目が僕の家です。
- 一次の文中の數詞を區別せよ。
- (イ) 二十日は太陽曆なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐるものだが、太陰曆になると、三十日もちがふことがある。
 - (ロ) 四月廿日は本校第廿五回の創立記念日なり。
 - (ハ) 八十の五分の一は十六なり。

第四章 代 名 詞

代名詞の種類

人代名詞 人の名の代りに用ひられるもの。

予は昨日かれと山に登りき。

練習四

練習

一次の文中の代名詞の種類及び稱を答へよ。

(イ) かしこに立てるは誰ぞ汝は彼を知れりや。

(ロ) こゝは南門の跡そこは金堂の跡かしこは法華堂の跡見まはせばいづこも

懐舊の種ならぬはなし。

(ハ) 手前どもはこれでもどれでも結構です。

(ニ) あなたに借りた書物の置場を忘れて、あちこちと捜してゐるのですがまだ

どこにも見つかりません。

第五章 動詞

一 文語動詞の活用の種類

文語動詞の活用の種類

動詞

用活格變				用活格正				種類	活用の
ラ	ナ	サ	カ	下	下	上	上		
變	變	變	變	一	二	一	二	段	
有	死	(す)	(來)	(蹴)	植	(似)	老	讀	
ら	な	せ	こ	け	ゑ	に	い	ま	
り	に	し	き	け	ゑ	に	い	み	
り	ぬ	す	く	ける	う	に	ゆる	む	
る	ぬる	する	くる	ける	うる	に	ゆる	む	
れ	ぬれ	すれ	くれ	けれ	うれ	に	ゆれ	め	
れ	ね	せよ	こよ	けよ	ゑよ	に	いよ	め	

形容動詞

右の中、ラ行變格活用に屬する動詞は「有り」「居り」「侍り」の三語あるだけであるが、「高かり」「美しかり」のやうに、形容詞「高く」「美しく」に、この動詞「あり」のつゞいて約められたものや、「明瞭なり」「平然たり」のやうに副詞「明瞭に」「平然と」に同じく動詞「あり」のつゞいて約められたものも亦ラ行變格活用である。これらを一括して形容動詞とも呼んでゐる。

語幹	未然	連用	終止	連體	尾	
					已然	命令
高か						
明瞭な	ら	り	り	る	れ	れ
平然た						

口語では左表のやうに活用する。

文語動詞活用の識別法

語幹	未然	連用	終止	連體	尾	
					假定	
美し	から	かつ	○	○	○	
静か	だら	だつ	だ	な	なら	

二 文語動詞活用の識別法

正格變格九種の活用中、左の六種に屬する動詞は、その數が極めて少いから、悉くこれを暗記せねばならぬ。

- 上一段活用
 - 射る
 - 見る
 - 鑄る
 - 著る
 - 煮る
 - 似る
 - 干る
 - 下一段活用
 - 蹴る
 - 顧みる
 - 惟みる
 - 鑑みる
 - 試みる
 - 居る
 - 率ゐる
 - カ行變格活用
 - 來
 - サ行變格活用
 - 爲
- (この外信ず、勉強すの類)

ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ
ラ行變格活用 有り 居り 侍り

④四段上二段下二段の三活用に屬する動詞は、その數が甚だ多いけれども、左の識別法によつてこれを知ることが出来る。

一「讀まず」「書かず」の如く打消のずがア段の音につくものは四段活用である。

二「落ちず」「悔いず」の如く打消のずがイ段の音につくものは上二段活用である。

三「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ段の音につくものは下二段活用である。

なほ動詞の語尾の假名の紛れ易いものは、ア行ハ行ヤ行ワ行であるから、大體左の如く心得ておけばよい。

動詞の語尾の假名遣

ア行

ワ行

ヤ行

ア行活用では

得 射 鑄
え え いてる いてる いてる
う う いる いる いる
うれ えよ (下二段活用)
いれ いよ (上一段活用)

ワ行活用では

植 飢 据
ゑ ゑ うる うる うる
ゑよ (下二段活用)
ゑよ (上一段活用)

ヤ行活用では

老 悔 報
い い ゆる ゆる ゆれ
いよ (上二段活用)

甘 嚙 癒 覺
消 凍 越
え え ゆる
ゆれ えよ
(下二段活用)

ハ行
ザ行

以上の外はすべてハ行活用であると心得ておけばよい。
ザ行ダ行の假名も紛れることがあるが、ザ行活用は左の一語のみである。

混ぜ ぜ ぜ ず ずる ずれ ぜよ (下二段)

この外に、講ず、變ず等の如くサ行變格に活用するものがある。其の他はすべてダ行活用であると心得ておけばよい。

練習五

練習

一次の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を表で示せ。

- | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|--------|
| (イ) 堪ふ | (ロ) 閉○ | (ハ) 消ゆ | (ニ) 信○ | (ホ) 絶ゆ |
| (ヘ) 据又う | (ト) 率ゐる | (チ) 悔○ | (リ) 用ふ | (ヌ) 死す |
| (ル) 任す | (ヲ) 怖づ | (ワ) 居り | (カ) 居る | (ヨ) 朽つ |

口語動詞の活用の種類

○二次の文中の動詞の活用に誤があれば正せ。

- (イ) 汝に出ずるものは汝にかへる。
- (ロ) 困難に堪^へゐる人は年老ひて憂なからん。
- (ハ) 恥じてよく改め、覺^えて忘れず。
- (ニ) 鷹は飢^うとも穂はつまず。

三次の文中の動詞に活用形の誤つてゐるものがあれば正せ。

- (イ) 才學なくば身を立つ能はず。
- (ロ) 日の暮るを待ちて檐の岐卓提灯に火を點す。
- (ハ) 與^れな受くよりも幸なり。

三口語動詞の活用の種類

口語動詞の活用の識別法

○ 語数の少ないもの

四 口語動詞の活用の識別法

用活格變		用活格正			種活用の類
サ變	カ變	下一	上一	四段	
(す)	(來)	(蹴)受	(着)起	有死書	語幹
しせ	こ	け	き	らなか	未然
し	き	け	き	りにき	連用
する	くる	ける	きる	るぬく	終止
する	くる	ける	きる	るぬく	連體
すれ	くれ	けれ	きれ	れねけ	假定
しせよ	こい	けろ	きよ	れねけ	命令

文語活用對照表

カ行變格活用 來る

サ行變格活用 爲る (この外、勉強する、論ずるの類)

○ 四段上一段下一段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけれども、左の見分法によつてこれを知ることが出来る。

一 「讀まぬ(ない)」「死なぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がア段の音につゞくものは四段活用である。

一 「落ちぬ(ない)」「みぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がイ段の音につゞくものは上一段活用である。

一 「受けぬ(ない)」「飢ゑぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がエ段の音につゞくものは下一段活用である。

文語動詞活用對照表

動詞

	(文語)		(口語)	
正格活用	上二段活用	上二段活用	上二段活用	上二段活用
	下一段活用	下一段活用	下一段活用	下一段活用
	下二段活用	下二段活用	下二段活用	下二段活用
變格活用	四段活用	四段活用	四段活用	四段活用
	ナ行變格活用	ナ行變格活用	ナ行變格活用	ナ行變格活用
	ラ行變格活用	ラ行變格活用	ラ行變格活用	ラ行變格活用
	カ行變格活用	カ行變格活用	カ行變格活用	カ行變格活用
	サ行變格活用	サ行變格活用	サ行變格活用	サ行變格活用

練習六

練習

- 一次の文中の口語動詞の活用の種類と活用形とを答へよ。
- (イ) 猿も木から落ちることがある。
 - (ロ) 恥づることを知らない者は、自ら身を辱める者である。

形容詞
活用表

第六章 形容詞

文語形容詞の活用表

活用の種類	語幹		語尾	
	未然	終止	連體	已然
高青美	く	く	し	し
ク活用	く	く	き	けれ
シク活用	しく	しく	しき	しけれ

口語ではシク活用が消滅して左のやうに一種類となる。

高美	語幹		語尾	
	未然	終止	連體	假定
○	く	い	い	けれ

猶口語では文語の未然形「青くば」と已然形「青ければ」とが同じ形になり、兩方とも「青ければ」といつて、假定の條件を示すから、この形を假定形といふ。

練習七

練習

一次の文中の形容詞を摘出し、且つその活用形を説明せよ。

(イ) 手のわるき人の憚らず文書を散らすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさし。

(ロ) 朝夕は凌ぎ易けれど、日中は堪へ難し。

(ハ) 大原女の打連れて來るも懐かしきに、下行く水の心地よき響を聞かせる

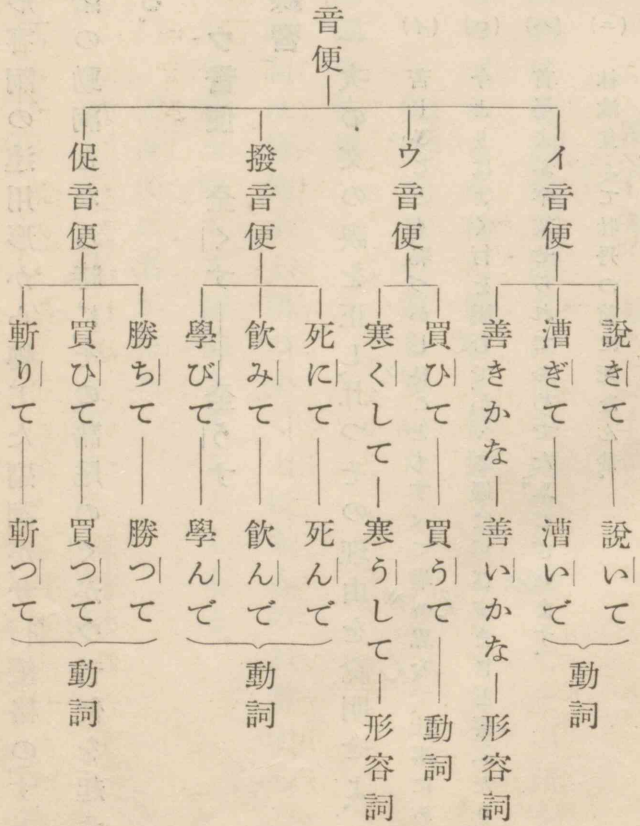
など、見るもの聞くものすべて昔ゆかしきあたりなり。

(ニ) 兩方の手平を高く立てて、雪の如き眞白い腹を出して、碧い海に一文字、

(ホ) 石が大きければ、水煙も夥しい。

音 便

第七章 音 便



○形容詞の連用形から轉じた副詞が、サ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を起すことがある。

ウ音便 全くす——全うす

練習八

一次の文の誤を正し、且つその理由を説明せよ。

- (イ) 苦しむことも、恥づかしむこともすべて堪へ忍むで仕事にあたらうと思ふ。
- (ロ) 今よりはよく行を慎むで、かゝる過は再びすまじと誓ふたり。
- (ハ) 首尾よく卒業せられておめでたうございます。
- (ニ) 林檎食ふて牡丹の前に死なん哉。
- (ホ) 轉むでも笑ふてばかり難かな。
- (ヘ) 任重くして負荷に堪へず。

副詞

第八章 副詞

○副詞は動詞・形容詞又は他の副詞に添うて、その語を修飾するものであるが、稀に體言を修飾することもある。

僅か三里の道を歩いた。

○副詞の位置

副詞は修飾する語のすぐ上にあるのが常であるが、時には他の語を隔てて修飾することもある。

度々使の者が來た。

さながら盆の水を覆すに似たり。

○副詞の種類

副詞の種類

(ト) ほんとうに悲しうございますが、あの人死んだとは思はれませぬ。

(イ) 本来の副詞

をさく、 やゝ、 恰も、 いと

(ロ) 轉來の副詞

早く、 美しく、 今、 露、
たとひ、 あまり、 極めて、 すべて

練習九

一次の文中の副詞がいづれの語を修飾してゐるかを説明し、且つ本来の副詞と轉來の副詞とを區別せよ。

- (イ) 春もやゝ景色とく月の月と梅
- (ロ) 決して再び失敗しないやうに特に注意せねばならぬ
- (ハ) たつた一つしかありません
- (ニ) いと嚴に仰せられし御言葉今もなほ忘れず

接續詞

接續詞の種類

第九章 接續詞

接續詞の種類

(ホ) ほとくと叩く水雞の音きけば久しく逢はぬ友かと思ふ

一 累加的のもの

又 且 尙 及び 況や その上
それに それから など

二 選擇的のもの

はた 或は 又は 若しくは
それとも など

三 因果的のもの

かくて されば 因つて 随つて
すると それで など

(ロ) 逆態

併し 但し されど しかしながら

練習一〇

練習

尤も ところが など。

一次の ——— のところに 適當な接續詞を入れよ。

- (イ) 諸車の通行を禁ず。郵便車はこの限りにあらず。
- (ロ) 飲食物を節せよ。健康に害あり。
- (ハ) 悔い改めよ。神の救にあづからむ。
- (ニ) 日已にくれぬ。行手は遠し。
- (ホ) 友人を訪問した。留守であつた。

感動詞

第十章 感動詞

○ 感動詞と感動の助詞

あはれ 太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。
 さて、残念のことをしました。

助動詞
 文語助動詞の種類
 及び活用
 受身

らるる

右のあはれさて、の如く文の上に来るものは感動詞で、
 あゝかなしいかな。
 三笠の山に出でし月かも。
 のかなかもの如く文の終りに来るものは感動の意味を表すは
 助詞である。

第十一章 助動詞

一 文語助動詞の種類及び活用

一 受身の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ル	ル	レヨ
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ

可能

る
らる
べし
べかり

自然的可能

二 可能の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ル	ル	○
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	○
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○
べかり	ベカラ	ベカリ	(ベカリ)	(ベカル)	(ベカレ)	○

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

○可能の助動詞「らる」は又轉じて動作が自然に起つて止められない意を表はすことがある。これを**自然的可能**といふ。
 亡き友のこのことのみ思はる。
 たゞ夢とのみ考へらる。
 ○「べし」は又命令にも用ひられる。

使役

す
さす
しむ
崇敬

三 使役の助動詞

明日午前八時出頭すべし。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	セ	セ	ス	スル	スレ	セヨ
さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ

四 崇敬の助動詞

- 一 父は謠曲を好まる。
- 二 校長は毎年上京せらる。
- 三 主上都を出で立たす。
- 四 御元服も院にてせさす。
- 五 おほやけも、屢行幸せしめ給ふ。

給
 御動作の下
 行を給ふ
 自身の
 見給へんとし
 給ふもつるあり
 へへややや
 給へ上
 はひさやま

- 六 殿下式場に臨ませらる。
 - 七 侍臣を差遣せさせらる。
 - 八 皇太子御位に即かしめらる。
 - 九 攝政宮殿下北海道に行啓せさせ給ふ。
 - 一〇 春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。
 - 一一 殿下にはいと快げに笑ひたまふ。
 - 一二 御年五十にあまりましますとぞ聞く。
- 右のるらるすさすしめ給ふせらるさせらるしめらるさせせたまふましますは他の動作を敬ふ意を表はす助動詞である。
- 一 謹みて新年を賀したてまつる。
 - 二 まことそらごと見給へんとて、まうで來つるなり。
 - 三 いくつといふことも更におぼえ侍らず。

時 完了
 つ ぬ たり り

四 本日出發仕り候。
 右のたてまつる給へ(下二段活用侍ら候は動作を丁寧にいふ助動詞である。
 かやうに他の動作を敬ひ、又は動作を丁寧にいひ表はす時に用ひる助動詞を崇敬の助動詞といふ。
 五 時の助動詞
 (イ) 完了の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	テ	テ	ツ	ツル	ツレ	テヨ
ぬ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
たり	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	〇
り	(ラ)	(リ)	リ	ル	(レ)	〇

過去

けり き

(ロ)

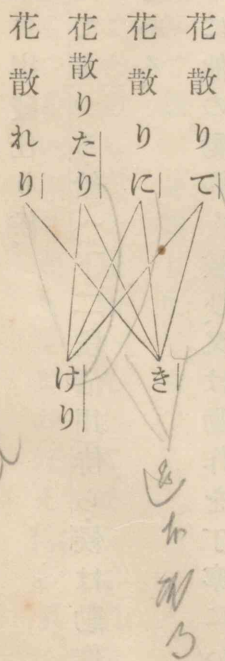
過去の助動詞

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	キ	シ	シカ	○
けり	(ケラ)	(ケリ)	ケリ	ケル	ケレ	○

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

又、きけりは更につぬたりりの連用形に添へて用ひられることがある。但し現代文にはあまり用ひられない。



未來

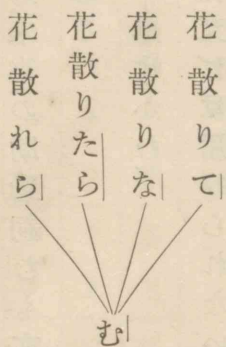
む

(ハ)

未來の助動詞

又、むは更につぬたりりの未然形に添へて用ひられることがある。但し現代文にはあまり用ひられない。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	ム	ム	メ	○



六 推量の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ	○	○	ラム	ラム	ラメ	○

けり

比況

ごとし

希望

たし

まほし

練習二

一〇 比況の助動詞

けり	〇	〇	ケリ	ケル	ケレ	〇
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ	〇	〇

一一 希望の助動詞

まほし	マホシク	マホシク	マホシ	マホシキ	マホシケレ	〇
たし	タク	タク	タシ	タキ	タケレ	〇
助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令

練習

(イ) 一次の文中から助動詞を指摘して、その活用を答へよ。
 彼は篤志家に救はれ、學費を給せられて、勉學することを得、遂に學界の泰斗

と仰がるるに至れり。

(ロ) 朝は水澄めれば底の眞砂も數へつべし。

(ハ) この兒利根こそ生れつきたためなほ幼くしてその氣根のほどもはかりがたく家富めりとも見えねば黄金のこと心得られず。

(ニ) 苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの誰かこの光を仰がざるべき。

(ホ) 父は父たらずとも子は子たらずるべからず。

(ヘ) 冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。

(ト) 寢覺の枕に通ひ來なり。あなゆかしの鐘の音や。

(チ) 旅行したきは山々なれども父のゆるし給はぬを如何にかせん。

(リ) あはれ今年の秋もいぬめり。

(ヌ) 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ。

小。打た小
 夜のうしろ
 解く小

口語助動詞の種類
 及び活用

受身

れる
 られる

可能
 れる
 られる

(ル) 男のすなる日記といふものを女もして見ゆとてするなり。
 (ヲ) 人の子たらんものは、重盛がその父に對する如くあらまほしきものなり。
 二左の助動詞の活用を示せ。
 す。き。む。たり(時) けん。さす。如し。たし。

一 受身の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	レ	レ	ル	ル	レ	レヨ
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレレヨ

二 可能の助動詞

可能の助動詞はれる。られるの二つで、その活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

三 使役の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	セ	セ	セル	セル	セレ	セセヨ
させる	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセセヨ

四 崇敬の助動詞

崇敬の助動詞はれる。られるの二つで、その活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。
 又、話の相手に對する敬意を示すものにますといふ助動詞がある。

今日は雪が降ります。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	マセ	マシ	マス	マス	マシレ	マシセ

使役

せる
 させる

崇敬
 れる
 られる

ます

時 過去

た

未來

よう

推量

よう
らしい

五 時の助動詞

(イ) 過去の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	タ	ラ	○	タ	タラ	○

(ロ) 未來の助動詞

未來の助動詞はう・ようの二つで、共に活用しない。

六 推量の助動詞

推量の助動詞はう・よう・らしいの三つである。う・ようは活用なく、らしいは次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	○	ラシク	ラシイ	ラシイ	○	○

打消

ない

ぬ

まい

指定

だのだ

です

比況

やうだ

七 打消の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ない	○	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ	○
ぬ	○	○	ヌ(ン)	ヌ(ン)	ネ	○
まい	○	○	マイ	○	○	○

八 指定の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
のだ	ノダ	ノダツ	ノダ	ノダ	○	○
だ	ダ	ダ	ダ	ダ	○	○
です	デセ	デシ	デス	デス	○	○

九 比況の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
やうだ	ヤウダ	ヤウダツ	ヤウダ	ヤウナ	ヤウナラ	○

希望

たい

練習二

一〇 希望の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい	○	タク	タイ	タイ	タケレ	○

練習

一次の文中の助動詞を指摘してその種類をいへ

(イ) 彼に取つていかに苦戦だつたかは之によつて察せられる。

(ロ) 世人が今一層社會の安寧秩序を保つことに力めるやうになつたら警察はむだな骨を折らないで、十分の効果をあげることが出来る。

(ハ) 荷を擔いで門口を出ようとすると、障子の内からこれ「大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で「まかりません」といふといや／＼、値はねぎるまい。その大根買は「う」といひさま障子をさらりと明けられた。

第十二章 動詞と助動詞との接續

文語動詞と文語助動詞との接續
未然形につゞく助動詞

一 未然形につゞく助動詞

一 文語動詞と文語助動詞との接續 (別表参照)

全動詞

しむ (使役崇敬) …… 書を讀ましむ (使役)
行幸せしめ給ふ (崇敬)

む (未來) …… 雨降らむ
鞠を蹴む

まし (推量) …… 春の心は長閑からまし
字を書かず

ず (打消) …… 罪をうけじ
勝つこと能はざりき

ざり

まほし (希望) …… 花見に行かまほし

四段活用
ナ行變格
ラ行變格

る (受身・可)
能・崇敬

父に死なる。 (受身)
父は東京に行かる。 (崇敬)
一日に百頁の書物は讀まる。 (可能)
客に長く居らる。 (受身)

す (使役・崇敬)

庭を掃かす。 (使役)
君側に侍らす。 (同)
式場に臨ませらる。 (崇敬)

らる (受身・可)
能・崇敬

先生に褒めらる。 (受身)
六尺の屏も越えらる。 (可能)
校長は毎年上京せらる。 (崇敬)

上一段活用
上二段活用
下一段活用
下二段活用
カ行變格
サ行變格

さす (使役・崇敬)

朝早く起きさす。 (使役)
早く來さす。 (同)
行幸せさせ給ふ。 (崇敬)

サ行變格

り …… 運動せり。

許容事項

- (一) らるがサ行變格の動詞に結びつく場合に「罪サル」「解釋サル」と用ふるも妨げなし。
- (二) さすがサ行變格の動詞に結びつく場合に「手習サス」「周旋サス」「賣買サス」と用ふるも妨げなし。
- (三) 「得シム」といふ場合に「得セシム」と用ふるも妨げなし。

二 連用形につゞく助動詞

連用形につゞく助動詞

全動詞

つ	ぬ	たり	き	けり	けん	たし
(完了) ……	(過去) ……	(過去) ……	(過去) ……	(過去) ……	(推量) ……	(希望) ……
書きもらしつ。	日はくれぬ。	全軍を率ゐたり。	友死にき。	花散りけり。	いつの頃より興りけん。	博覽會を見たし。

右の中 **①** **き**が**カサ**變格の動詞につづく場合に限り、左表のやうな例外がある。

		未然
カ變	來 ^カ し ^カ か	連用
サ變	爲 ^シ し ^シ か	
	爲 ^シ き	

② **ぬ**は**ナ**行變格の動詞にはつづかない。

許容事項

サ行四段活用の動詞を助動詞の「ししか」に連ねて「暮しし、時過しし、かば」などいふ場合を「暮せし、時過せし、かば」などとするも妨げなし。

三 終止形につづく助動詞

終止形につづく助動詞

ラ行變格以外の動詞

らむ	静心なく花の散るらむ。
べし	明日は雨降るべし。
めり	紅葉亂れて流るめり。
らし	山の白雪積るらし。
まじ	雨降るまじ。
べかり	危険にて近づくべからず。
なり	蟲の聲すなり。

右の助動詞がラ行變格の動詞と結びつく場合には、その連體形からつづく。
君側に侍るべし。かくこそ有るらし。

四 連體形につづく助動詞

全動詞
なり(指定)……夜は今明くるなり。
如し(比況)……水の流るる如し。

但、なりは又體言の下にもつづく。

連體形につづく助動詞

これは私の本なり。
 指定のたりは用言の下にはつゞかないで、體言の下にのみつ
 づくから用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞である
 と心得ておいてよい。
 比況の如しは助詞「が」を挟んで、動詞・形容詞の連體形に添はること
 が多い。

水の流るるが如し。

花の美しきが如し。

又、助詞「の」を挟んで體言に添はることもある。

海の面鏡の如し。

五 已然形につゞく助動詞

四段活用——り(完了)……書を読み。

六 (附體言)につゞく助動詞

已然形につゞく助動詞

體言につゞく助動詞

助動詞相互の接続

助動詞相互の接続

助動詞は數個を併せ用ひて種々複雑な意義をあらはすことが出来る。そして其の接続には、各定まつた法則がある。即ち動詞の未然形に連るものは、助動詞にも亦その未然形に連り、其の他連用形・終止形等、皆動詞に連る場合と同じである。



日夜奔走せ

サ變未然形

しめ

使役未然形

られ

受身連用形

たり

時連用形

き

時終止形

○らんべしまじ等の如く、ラ行變格活用動詞に限つてその連體形に連るものは、助動詞に於ても、ラ行變格活用に等しい助動詞には又その連體形に連るものである。
 彼は既に中學校を卒業せしなるべし。
(ラ變ニ等シイ活用連體形)

練習一三

練習

- 一次の文中の助動詞を指摘し、その接續法を述べよ。
- (イ) 浅草の鳩も淋しく思ふらん日ごと見なれしわれを見ぬため。
 - (ロ) 夏の初は青梅こそ心地よきものなれ。青葉のしげれる枝に眞青の實の珠をなせる美しといふにはあらねど清々し。
 - (ハ) 世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。
 - (ニ) 遙に忘れたるこし方も今更思ひだされて消え入るばかりなり。
 - (ホ) 秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる。
 - (ヘ) 秋風に初雁がねぞ聞ゆる誰が玉章をかけて來つらむ。
- 二次の文に誤があれば正し、且つその理由を説明せよ。
- (イ) 今日先生の出せし問題は甚だ解し易かり也。
 - (ロ) 吾は終夜眠らずして考へり。

- (ハ) 身體に害を及ぼしは過度に勉強し故なり。
 - (ニ) その文章は余に讀ま^せ給へ。
 - (カ) 車内に餘地ある時は出入口に御立ち下されまじく候。
 - (ク) 汝自ら爲し得ざることとは之を人に強ゆべからず。
 - (コ) かの友は既に死にぬ。
- 三 指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接續する時、その接續のちがつてゐる點をあげよ。
- 四 指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接續の上から見て、どんなにこれを區別するか。
- 五 現在完了の「り」と動詞との接續法をのべよ。
- 六 過去の「き」「し」「しか」とカサ變格活用の動詞との接續法のべよ。

口語動詞と口語助動詞との接続
未然形につづく助動詞

二 口語動詞と口語助動詞との接続 (別表参照)

一 未然形につづく助動詞

全動詞 | ぬ | 字を書かぬ。
 | ない | 朝早く起きない。

れる (受身・可) | 犬にかまれる。(受身)
 | 六尺位の高さなら飛ばれる。(可能)

四段活用 | せる (使役) | 先生は東京に行かれた。(崇敬)
 | 生徒に本を読ませる。

う (未來・推量) | 明日は雨が降らう。

られる (受身・可) | 先生に褒められた。(受身)
 | 六尺位の高さなら越えられる。(可能)

上一段活用 | させる (使役) | 先生は満洲に出張せられた。(崇敬)
 | 大工に家を建てさせる。

カ行變格 | よう (未來・推量) | 次の日曜日に遠足しよう。

サ行變格 | まい (打消) | 今日友は學校に來まい。

右の中、未來のようと、打消の**ない**とはサ變の活用に對しては**し**の
のみつゞき、**せ**にはつゞかない。

勉強しようと思ふ。(勉強せようは誤)

運動しない。(運動せないは誤)

又、打消の**まい**もサ變の活用に對しては**し**のみつゞき、**せ**にはつ
づかない。

彼は何とも感じまい。(感ぜまいは誤)

二 連用形につづく助動詞

ます (崇敬) | 私もお伴します。

全動詞 | た (完了) | 雨が霽れた。

たい (希望) | 本を讀みたい。

三 終止形につづく助動詞

連用形につづく助動詞

終止形につづく助動詞

連體形につづく助動詞

四 連體形につづく助動詞

全動詞—らしい(推量)……………

雪が積るらしい。
雨が霽れるらしい。

四段活用—まい(打消)……………彼は知るまい。

全動詞—

の	のだ	指定……………梅の花が散る	の	のだ
のである	の		のである	の
やうだ	やうだ	(比況)：天から落ちる	やうだ	やうだ
やうである	やうである		やうである	やうである

比況の助動詞やうだ(やうである)は助詞「の」を挟んで體言に添はることもある。

人生は夢のやうだ。(やうである)

體言につづく助動詞

五 (附體言につづく助動詞)

體言—
 だ
 です
 指定……………これは私の本
 だ
 です

練習一四

練習

一左の文から助動詞を抜出して、そのつゞき方を説明せよ。

- (イ) もう一度ゆつくり考へて見よう。
- (ロ) 兄は野球をするらしく、弟は庭球をするらしい。
- (ハ) 那須の與一に扇の的を射させる。
- (ニ) 私にはどうしても信ぜられない。
- (ホ) たゞ一度で懲りさせたらしい。
- (ヘ) 湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。
- (ト) あの人もその話を聞いて大變喜んでゐるらしい。一度逢つて話したいと

助詞の用法

思つてゐるが忙しいので當分は逢はれませう。

二左の文に誤があれば正し、且つその理由を説明せよ。

(イ) そんな間違つたことはすぬまいと思ふがどうだらう。

(ロ) 君も行き給へ、僕も行こう。

(ハ) 明日は晴れやうから出發しましょう。

第十三章 助詞の用法

助詞には色々あつて、その用法も亦複雑である。今その中で誤謬の生じ易いものについて其の用法を説明しよう。

一 ぞなんこそ

舜何人ぞ。さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表はしてゐる。ぞ

ぞ

なん

が活用語につく時は、その連體形を受ける。

五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞ連體形(手變)する。

奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ連體形(形容詞)秋はかなしき。

夕涼みよくぞ男に生まれける。連體形(咏嘆)

右は文の中程にぞを添へたもので、かやうな場合には下は連體形で結ぶのである。

かく緩かになん流るる。連體形(ラ、下二)

人と争はざるなん賢き。連體形(形容詞)

その人、貌よりは心なんまさりたる。連體形(完了)

右のなんもぞと同じく強く指し示す意を有する助詞で、下は連

こそ

體形で結ぶのである。

物のあはれは秋こそ〔已然形(ラ、四)〕まされ。

貌こそ美しけれ、心はむげに劣れり。

死なば一緒にこそ〔已然形(未來)〕もかくもならぬ。

右のこそはぞなんよりも一層強く指し示す意を有する助詞で、下は已然形で結ぶのである。

二 やか

かゝることあり〔終止形(ラ變)終止形(形容詞)〕やなしや。

かゝることある〔連體形〕かなさか。

夜は静かに眠らる〔終止形(可能)〕や。

夜は静かに眠らる〔連體形〕るか。

か や

霞か雲かはた雪か。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表はしたもので、その活用語につく時はやは終止形をかは連體形を受ける定めてあるけれども、今はやも連體形を受けることが多い。(許容事項参照)

花や咲きし〔連體形(過去)〕誰かある〔連體形(ラ變)〕。

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表はしたもので、下は連體形で結ぶのである。

君は甲乙の中いづれを選ぶか。

五の三倍は幾何なるか。

右の如く上に疑の語ある時は、下にかを用ふる定めてあるけれども、今はやを用ひることもある。(許容事項参照) 誰かその悲慘に涙を流さざるべき。

反語

係結

其の時悔ゆとも甲斐あらんや、かくてやは果つべき。

水鶏のたゞくなど心細からぬかは。

右のや・かは反語の意をあらはす。そしてかやうな場合には感動の助詞はを伴つてやはかはとして表はれることが多い。

以上述べたやうに文の中程にぞなんこそやかがあると、下は連體形又は已然形で結ぶのである。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法はない。

係語

結語

ぞなんやか……………連體形

こそ……………已然形

係結の法則は以上のやうであるけれども、若しその文が接續の

用をなす助詞によつて下に續けられる時は、その結びは表はれないで直に下文に接續する。

珍しき春もあすとぞキコニルきこゆればくれなむ年を何か惜しまむ。

淀川こそ洪水の害最もはげしきものナレなれば官廳の經營苦心を極めたり。

練習

一次の文の係結について説明せよ。

- (イ) 一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。
- (ロ) 勉強に倦み給はん折は花なんこよなき慰めなる。
- (ハ) 自ら春風に坐すといひけん心地のみこそせられしか。
- (ニ) 重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれけり、けり、けり。

練習一五

ば

三

ばともども

- (ホ) 偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。
- (ヘ) そびらにははやこときれし將校の亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。
- (ト) 昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。
- 二次の文の係結に誤あれば正し、且つ其の理由を説明せよ。
- (イ) かの童ぞよく道を知ればつきて問はるべき。
- (ロ) その戸を開きてこそ見んと思ひけん。
- (ハ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ工なれ。
- (ニ) 「貧家に生れたるぞ幸福なり」と古聖もいはれたる。
- (ホ) 音にきこえし此の壇の浦こそ源平二氏が最後の決戦を爲しし古蹟なり。

明日雨降らば延期せむ。

明日天氣よくば旅行せむ。

仮定 確定

今日雨降れば行かず。
水清ければ大魚棲まず。
右のやうに**ば**が未然形に結びつく時は**假定**已然形に結びつく時は**確定**の意味をあらはす。

口語では假定形に**ば**を添へて假定の意を表はし、確定の意を表はすには多く終止形に**ので**からを添へたものを用ひる。

明日雨が降れば延ばさう。(假定)

今日は雨が降る**ので**延期する。(確定)

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらじ。

たとひ兵寡くともよもや敗るることはあらじ。

花咲けども鶯未だ來鳴かず。

この品好けれど**ども**買はず。

ども 確定

とも 假定

右のやうにともが動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は**假定どども**が動詞形容詞の已然形に結びつく時は**確定の意**味をあらはす。

現代文では誤解を生じない限りに於て、**ともども**の代りに**も**を用ひることが許容されてゐる。(許容事項参照)

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場に入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

口語―てもけれどもても。

鳥の鳴かない日はあつても……

品は好いけれども……

茶は飲んでも……

四と

並列のと
物なうふり場合

動作の標準を示す
と

上文を指示すると

月と花と。 宗教と道德との關係。
京都と神戸と長崎とに行く。
事物を並列するときは、右の例のやうにその一々の下にとを添へる定めてあるけれども、誤解を生じない時に限り、最終の語句の下に之を省いてもよろしい。(許容事項参照)

但、左のやうな場合には之を省くことが出来ない。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のととは動作の標準を示す。

月出づと見えて

太平洋の夜は、今明けなんとす。

右のとは上文を指示す。

右のやうにとが活用する語につく時は、終止形を受ける定めてあるけれども、現代文では連體形を受けることもある。

(許容事項参照)

五 だにすらさへ

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞかなしき。

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

行方すらも覺えず。

雨降り風さへ吹く。

だに

すら

さへ

たゞなること
かゝるべしかな

涙をさへ落して喜びたり。

右の内だにすらは軽いことをあげて重いことを言外に思はせ、さへはある上に更に添ひ加はる意味の助詞である。

口語ではだにもすらもなく、さへが一般に用ひられる。

鳥にさへ及ばない。 行方さへも分らぬ。

六 なな……そ

決して怠るな。 ゆめ忘るな。 危き場所に居るな。

右のやうになを動詞の終止形に添へると、その動作をするなと禁止する意味を表はす。 但、ラ變の動詞に限つて、その連體形に添はるのである。

かくなのたまひそ。 深くな咎めそ。

吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻かな。

な……そ

な

近く寄りて過なせそ。

な…：そはなと同じく禁止の意味をあらはす。そしてこの場合、**そは**動詞の連用形を受ける。但**カサ**變格の動詞に限つて、その未然形を受ける。

七 **ばやなむ**

繪を巧に畫かばや。

我が子、學者にならなむ。

右の**ばやなむ**は願望の意をあらはし、共に**未然形**につく。

八 **にへ**

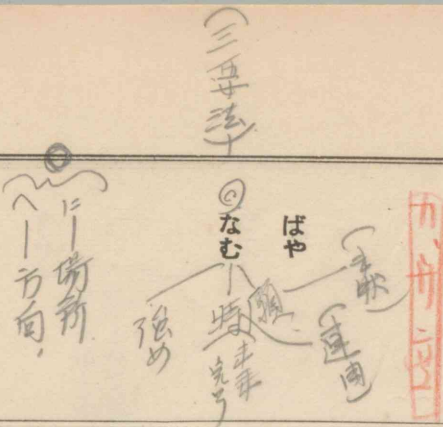
學校に行く。

大阪に住む。

前へ進む。

彼方へ向ふ。

右の**に**は場所を示し、**へ**は方向を示す。



口語ではへもににも同じやうに用ひられる。

學校へ行く。 彼方へ行く。

九 **がにを**

大いに努力せしが遂に效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家もなし。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。

右の**がにを**は語句を接續する助詞で、活用する語の**連體形**に結びつく。

口語では**が**は文語と同じく**にを**は**のに**に相當する。

一〇 **て**

日くれて道遠し。

て

まにが

て

言はてやみぬ。(ては)ずての變化したものである。
右のてでは語句を接續する助詞でては連用形にては未然形に
結びつく。

練習二六

練習

一 左の文中の——の施してある助詞を説明せよ。

- (イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
- (ロ) すべて月花をばさのみ目にて見るものは。
- (ハ) げに聞くだに涙の種ぞかし。
- (ニ) 良からぬ小説などな讀み給ひぞ。
- (ホ) 我に對する爲にはあらで先生を敬する爲にてありけるよ。
- (ヘ) 月を見れども樂しからず鳥を聞けども嬉しからず。
- (ト) 今朝來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。

四
すべて月花は見るもの
あらで先生を敬する
爲にてありけるよ

(チ) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。

二 左の文に誤があれば正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 今のうちに勉めずんば老ひて後に悔ふれども及ばざらむ。
- (ロ) この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず。
- (ハ) 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。
- (ニ) 成績あしとも失望するに及ばず。
- (ホ) 板垣死するとも自由は死せず。
- (ヘ) 懇に戒めども馬耳東風と聞き流すのみ。
- (ト) もし不都合の點あれば指摘せらるべし。
- (チ) もし御差支も候へば御一報下されたく候。
- (リ) 見事かの頭上の林檎を射落せば汝が命を助けん。
- (ヌ) 車へ乗りて行かむ。

Handwritten notes and corrections in the right margin of the left page, including 'なぐとも思はぬ' and other annotations.

- (ル) 立錐の餘地たていまななし。
- (ヲ) 雪ゆきだに生憎に降りいでて寒氣いよく加はりぬ。
- (ワ) 敵衆てくしゆもとも恐るゝな。
- (カ) 石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盗人の種はつきまじ。
- (ヨ) 世人に諷ふらるるか心愛こゝろしのあ。
- (タ) 暮くるを待たで旅館に宿る。
- (レ) 志を遂げんと欲すれば須く努力すべし。
- (ソ) 彼もし兄の剛健なるに似れば死して身後の名を成さん。
- (ツ) 終日業務を取扱はしむるといふ。
- (ネ) 功を急ぎて過すな。

三期一取

形容詞連中形に接尾語

終止形より終止形

品詞の轉成

轉成の名詞

第十四章 品詞の轉成

一 轉成の名詞

- (イ) 動詞の連用形から || 光。霞。水。謠。
- (ロ) 動詞の終止形から || 茂シゲル。薰カケル。勝マサル以上人名。かげろふ。
- (ハ) 形容詞の語幹から || 高低たかひ。
- (ニ) 形容詞の語幹に接尾語みさを添へる。厚み。重さ。
- (ホ) 形容詞の終止形から || あかし燈。すし鮓。からし芥子。

二 轉成の代名詞

- (イ) 名詞から || 君。僕。小生。殿。臣。私。

名詞後輩

轉成の副詞

三 轉成の副詞

轉成の接續詞

① 名詞から

今日雨降る。終日食はず、終夜寝ねず。

(ロ) 動詞の連用形から

たとひ雨が降るとも……

それはあまりひどいことです。

② 形容詞の連用形から

水よく流る。花少しく開く。

四 轉成の接續詞

(イ) 名詞から

暑さ甚しく候處、御障りも無之候や。

(ロ) 動詞から

土曜日及び日曜日は休業す。

紛れ易い品詞

たり

(ハ) 副詞から

山また山を越ゆ。

第十五章 紛れ易い品詞

多くの單語の中には、語形が同じで、品詞を異にするものがあり、又同じ品詞の中でも種類を異にするものが多いから、品詞を鑑別する場合に於ては、特にこれらの同形異義の語に注意せねばならぬ。左にその主なるものを説明しよう。

一 たり

書を讀みたり。(現在完了の助動詞)

君君たり臣臣たり。(指定の助動詞)

山巍然たり。(動詞の語尾)

なり

二 なり

建築なりぬ。(動詞)

彼は學生なり。(指定の助動詞)

花の美しきなり。(指定の助動詞)

日暮るゝなり。(指定の助動詞)

鐘の音すなり。(咏嘆の助動詞)

風靜かなり。(動詞の語尾)

らむ

三 らむ

取らむ。(らは動詞の語尾、むは未來の助動詞)

花の散るらむ。(推量の助動詞)

なむ

四 なむ

散りなむ。(なは現在完了の助動詞、ぬの未然形、むは未來

ぬ

五 ぬ

の助動詞

咲かなむ。(願望の助詞)

月なむ見ゆる。(係の助動)

花咲きぬ。(現在完了の助動詞)

花の咲かぬ枝。(打消の助動詞の連體形)

な

六 な

ゆめ忘るな。(禁止の助詞)

忘れじな。(感動の助動)

花散りなば。(現在完了の助動詞ぬの未然形)

しか

七 しか

昨日こそ早苗とりしか。(過去の助動詞きの已然形)

君は何時歸りしか。(しは過去の助動詞きの連體形、かは疑問の助詞)

八 し

來し方行く末の事おもひやらる。(過去の助動詞きの連體形)

體形

かゝることなきにしもあらず。(強めのし)

九 ばや

まだしき程の聲を聞かばや。(願望)

心あてに折らばや折らむ。(假定の助詞ばに疑問の助詞

やを添へたもの)

紅葉すればや照りまさるらむ。(確定の助詞ばに疑問の

助詞やを添へたもの)

ばや

し

一〇 に

木枯吹きに吹く。(動詞の連用形をうけ、下に同じ動詞を

重ねて、その意味を強める)

秋は來にけり。(現在完了ぬの連用形)

山に嘉木あり、海に珍魚あり。(位置を示す助詞)

夜の明けたるに何とて起き出でざる。

(連體形をうけ、反對の意を示す助詞)

練習

一 左の文中の傍線を施した語の文法上の差異を述べよ。

(イ) かくこそ思ひしか。いつの年うせ給ひしか。

(ロ) 死にし子顔よかりき。

露と消えにし命かな。

Handwritten notes in the margin explaining the grammar of the example sentences, including terms like '連用形' and '助詞'.

(ハ) 汝と今や別るなり。 吼喚。

お

(イ) 汝と今別るるなり。 指定。

あ

その謀空しくなりぬ。 動詞連用。

(ニ) 今轉來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。 願。

花なむこよなき慰めなる。 (係) 花の上をりなむとある。

見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞ咲かまし。 動詞連用。

(ホ) 花の色はうつりにけりな。 感。 動詞。

主なしとて春な忘れぞ。 禁。 動詞。

(ヘ) 死にたる人。 現在をつり物動詞。

人の人たる道。 指定の助動詞。

(ト) つきぬ怨。 打消の助動詞。 連体形。

糧食つきぬ。 現在完了の助動詞。

(チ) 生きとし生けるもの。 汝め。

生き残りしもの。 過去助動詞。 連体形。

山巍々たり。 形容詞。 連体形。

空晴れたり。 現在完了の助動詞。

彼は帝大の學生たり。 指定の助動詞。

(ヌ) 人こそ知らぬかわかまもなし。 打消の助動詞。

疾く行きぬ。 現在完了の助動詞。

(ル) 亡き父のことのみ偲ばる。 受身の助動詞。 自然の助動詞。

父は謡曲を好まる。 受身の助動詞。

大人に打たる。 受身の助動詞。

あめる顔の愛らしさ。 完了の助動詞。

文章篇

第一章 文の成分

文の成分
主語・述語

Says he Ambitious

一 主語・述語

- (一) 犬 走る。
- 鳥 飛ぶ。
- (二) 魚が 躍る。(口)
- 山 高し。
- 水 清し。
- 大軍 雲霞の如し。
- 花が 美しい。(口)
- (三) 正成は 忠臣なり。

文の主成分
主語の構成

犬は 動物だ。(口)

右の例の(一)は「何がどうする」。(二)は「何がどんなだ」。(三)は「何が何だ」といふ形式の文である。そして「何が」に當るもの、即ち文の題目を表はす語を主語といひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」に當るもの、即ち敘述を表はす語を述語といふ。

主語と述語とは如何なる文にも缺くことの出来ぬものであるから、これを特に文の主成分といふ。

二 主語の構成

- (一) 鳥 鳴く。
- 山 巍然たり。
- 風 涼し。
- (二) われも 歸る。

空は 青し。

月が 清い。(口)

右の例のやうに、主語は體言が單獨に表はれる場合と、下に助詞の添うて表はれる場合とがある。

(三) 死ぬるは 悲し。

赤きが よし。

美しいのは 花です。(口)

右の例のやうに、主語は又體言に準ずべき語からなることがある。

三 述語の構成

(一) 白雲 飛ぶ。

天 高し。

述語の構成

海が 闊い。(口)

(二) 夜も 明けたり。

花 咲きぬ。

(三) 歲月 流るる(が)如し。

旅行は 樂しかつたか。(口)

右の例のやうに、述語は普通に用言又は用言に助動詞・助詞が添うて表はれるものである。

(一) 尊氏は 逆臣なり。

君 君たり。

怒濤 山の如し。

私は 生徒だ。(口)

修飾語

右の例のやうに、述語は又體言に、助動詞が連つた語から成ることがある。

四 修飾語

(一) 赤き花。咲く。

親しい友人が来た。(口)

(二) 風 烈しく吹く。

山が 甚だ高い。(口)

右の例で、形容詞赤きは花を、形容詞親しいは友人を修飾し、副詞烈しくは吹くを、副詞甚だは高いを修飾してゐる。かやうに文中にあつて他の語を修飾する語を修飾語といふ。そして赤き、親しいのやうに體言を修飾するものを形容詞的修飾語といひ、

形容詞的修飾語の構成

烈しく甚だのやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

五 形容詞的修飾語の構成

我が庭に 美しき朝顔 咲けり。

静かなること 林の如し。

長閑な光が 油のやうな海面に融けてゐる。(口)

進歩主義は 有爲なる國民の忘るべからざる要訣なり。

渦巻く波に とび込んだ。(口)

寒からぬ雪は 雲なき空よりこぼれて顔を撲つ。

少年の時 重ねて來らず。

富士の白雪が 朝日に照りはえてゐる。

右のやうに形容詞的修飾語にはいろいろ種類がある。

副詞的修飾語の構成

六 副詞的修飾語の構成

食指 おのづから 動く。

太閤は 平常 鶴を 愛せられたり。

鐵道 不通に なること 往々にして あり。

津々として 詩趣を 生ず。

一切の物音は はたと 絶えた。(口)

今朝 東京へ向けて 出發した。(口)

午後一時より 講演會を開く。

あちらへ行け。

春はくれども 花 咲かず。

右のやうに副詞的修飾語にはいろいろ種類がある。

接續の語

獨立語

客語

七 獨立語

(一) 天氣晴朗なり。されど波高し。

猫 鼠を 捕ふ。

太郎は 級長と なつた。(口)

面は 猿に 似たり。

二の三倍は 六に 等し。

父 家を 子に 譲る。

次の一隊は 大山中尉に 引率せられて 川を 渡れり。

犬 人に 打たる。

上文の傍線の引いてある語はそれ／＼に用言を修飾する副詞的修飾語であるが、かやうに體言に助詞とをにの結合してゐるものは特に之を客語といふ。

同格の語

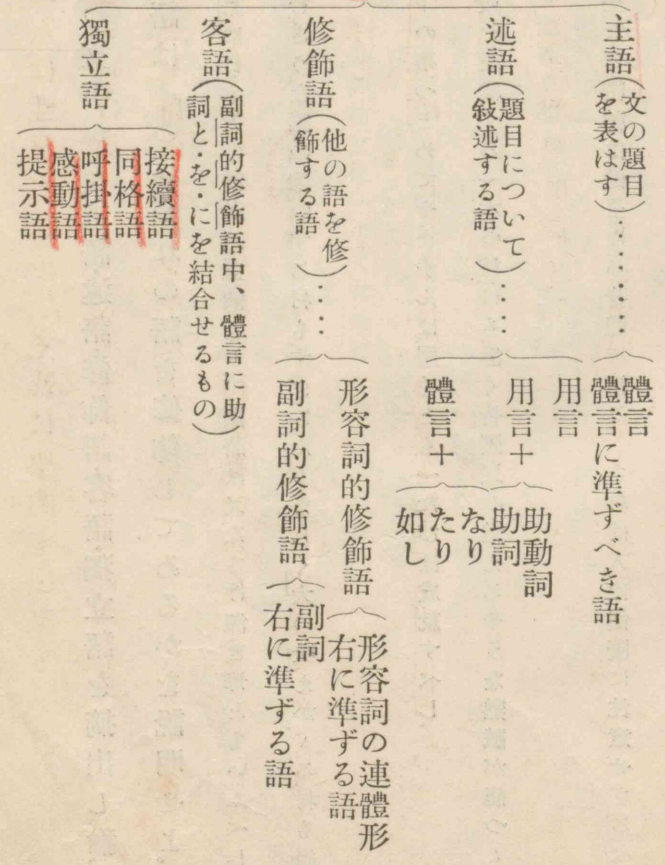
呼掛の語

感動の語

提示の語

- (一) あの人は性質がよい。それに學問も出来る。(口)
 - (二) 執權義時は弟時房と長男泰時とを都に遣したり。爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に。
 - (三) 太郎やおまへもう學校に行かないかえ。(口)
あれ見給へ箱王殿。空をとぶ翼も皆別の翼をぞまじへざりける。
 - (四) やあ、いかにあれなるは佐野源左衛門の尉常世か。
あゝ、花が咲いた。(口)
 - (五) 太郎は、性、理學に長ず。
大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。
- 右の例のされどそれに〔接續の語〕執權、弟、長男、爾〔同格の語〕太郎や、箱王殿〔呼掛の語〕やあ、いかにあゝ〔感動の語〕太郎は、大日本帝國は

文の成分



練習一

練習

一左の文中から主語・述語・修飾語・客語・獨立語を摘出し、猶修飾語はそのいつれの語を修飾してゐるかを説明せよ。

國語は日本人の精神的血液なり。國語は又なさけ深き母ともいふべし。

ねむさうな雞の聲のする村もすぎけたまはしく犬の吠えかゝる村も過ぎ

天下の事つとめてやますんば遅くとも一たびは成就すべし。

神殿を組織する一本の柱にも悉く皆國民の燃えるやうな熱誠が籠つて居

健全なる精神は健全なる身體に宿る。されば人は健康に注意せざるべからず。

彼は急所をつかれてはたとつまつた。

- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ヘ)

急き
重
提

- (ト) (チ) (リ) (ヌ) (ル) (ヲ) (ワ) (カ) (ヨ) (タ) (レ) (ソ)

正確なる知識は鋭利なる機械の如し。

兎は前足が短い。

帝國議會は毎年之を召集す。

拍手急霰に似たり。

誦經の聲遠く響きて鶯の歌とこしなへに高き梢にあり。

彼は性質極めて温順なり。

いかに母御前父はいづくにおはしますぞや。

鐘が鳴つた。それでも授業は始まらない。

あゝわが運命もこれにて定まれるか。

少納言よ香爐峯の雪はいかならん。

不忍の池詩人これを小西湖といふ。象は體大なり。

我が少年諸子よ諸子は曾て死を考へしことありや
死王老へしとありや

(ツ) 我が少年諸子よ諸子は曾て死を考へしことありや
(ネ) 雁よ、棹になれ、鍵になれ。
(ナ) 口は禍の門なり。されば口を慎まざるべからず。
(ラ) あゝ秋が来た。私の好きな秋が来た。
(ム) 煙火が揚つた。選手は規則正しく出發線に整列した。

文の成分の位置と省略

第二章 文の成分の位置と省略

正序法

一 正序法

(一) 主 述

(一) 朝顔 咲けり。

(二) 主 客 述

(二) 雨が 降り出した。(口)
猫 鼠を 捕へたり。

月が 光を 放つてゐる。(口)

(三) 修 主 修 客
修 述

(三) 庭の 朝顔 美しく 咲けり。

烈しい 雨が 俄に 降り出した。(口)

隣家の 猫 大きな 鼠を 巧に 捕へたり。

十五夜の 月が 青い 光を 皎として 放つてゐる。(口)

右の文は成文の位置の普通なものである。これを正序法といふ。そして主語は述語の前、修飾語は被修飾語の上に来るのが普通である。

(四) 獨立語

(四) 獨立語の中、感動の語や提示の語や呼掛の語は文の頭に

おかれるのが普通である。

あはれ、今年の秋もいぬめり。

象は鼻長し。
 太郎やお前もう學校に行かないかえ。(口)
 又、**接續の語**は語句の間に、同格の語はそれに對する語の
 すぐ上に位置を占める。

二 倒序法

- 一 美なるかな山河のかため。
述 主
- 二 たれですか、君は。
述 主
- 三 雲のいづこに月やどるらむ。
述ノ修 主 述
- 四 僕の本をだれが持つていつたらう。(口)
客 主 述

省略法

三 省略法

右は文の語調を調べ、或は語勢を強めるために、文の成分の位置を替へたものである。これを**倒序法**といふ。

一 人を相手にせず、天を相手にせよ。
 二 この處に塵芥捨つべからず。
 三 福は内、鬼は外。
 四 彼は末頼しき少年にこそ。
 五 神よ、願はくは助け給へ。
 六 さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽はいづこに。夜の大殿に。

右の(一)(二)は主語(三)(四)は述語(五)は客語(六)は種々の成分の省略さ

れたものである。かやうに文はまた冗長を避け、文意を強めるがために、其の成分を省略することがある。これを省略法といふ。

練習二

左の文中にある倒序法省略法について説明せよ。

- 例(イ) 油断大敵なり
- 例(ロ) 祝へ諸人もろとも
- 例(ハ) 人の噂も七十五日
- 例(ニ) 人は講るとも、我は咎めず
- 例(ホ) 千里の道も足もとより
- 例(ヘ) とまれ蝶々、さく花に
- 例(ト) 牛馬繋ぐべからず

さくはなに
蝶々も

句及び節

句

句

第三章 句及び節

- 例(チ) われに惜むな家づとの一枝の筆の花の色香を。
- 例(リ) 道路の左側を通行すべし。
- 例(ヌ) 春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬ限はあらじと思ふ。
- 例(ル) 愉快だつたねほんたうに昨日の遠足は。
- 例(ヲ) たれかあはれと聞かざらんあはれ血に泣くその聲を。
- 例(ワ) 降る雪にきこりの道もうもれけり。
- 例(カ) さあどうぞこちらへ
- 例(ヨ) 歌書よりも軍書にかなし吉野山
- 例(タ) 悠々たるかな天地遼々たるかな古今

名詞句

主語 客語
場合

① 語 各名は日口
② 主 述 在 あり 他 の
③ 文 の 一 成 分 と な っ て いる も の で あ る 。
④ 同 じ 年 月 と 文 と を つ づ け

形容詞句

- 一 香の高きは梅の花なり。
 - 二 かしこに松の生ひ茂れる岡あり。
 - 三 水清ければ大魚棲まず。
- 右の例の傍線の引いてある部分は、いづれも文がその獨立を失つて他の文の一成分となつてゐるものである。これを句といふ。句には名詞句形容詞句副詞句の三種がある。
- 一 名詞句—名詞の用をなすもの。
一 香の高きは梅の花なり。 (主語)
 - 二 われは時のうつるを知らざりき。 (客語)
 - 二 形容詞句—體言を修飾するもの。
僕は君の來るのを待つてゐた。 (客語)

副詞句

下
上
中

節

- 一 雪の降る夜はもの寂し。
 - 二 瀑の落つる音は百雷の轟く響に似たり。
名も無い草が咲いてゐました。(口)
 - 三 副詞句—副詞の用をなすもの。
 - 一 水清ければ大魚棲まず。
 - 二 天氣晴朗なれども波高し。
 - 三 秋が來ると木の葉が落ちる。(口)
- 節
- 一 東寺の塔はわれを迎へて立つ。
 - 二 鴨川の水はわれを迎へて歌ふ。
 - 右は何れも一つの文である。今これを重ねて、東寺の塔はわれを迎へて立ち、鴨川の水はわれを迎へて歌

ふ。

といふと、又一つの文となる。この場合で傍線の部分は各、對立したもので、一方が他の一方の成分ではない。この各の部分を節といふ。

練習三

一 左の文中の句と節とをあげ、且つ句についてはその何句であるかを答へよ。

- (イ) 味のよき魚は波の荒き海に住む。
- (ロ) 能ある鷹は爪をかくす。
- (ハ) 無理が通れば道理が引込む。
- (ニ) 水は方圓の器に従ひ人は善惡の友による。
- (ホ) 腦の良いのは一生の徳だ。

- (ヘ) 残暑凌ぎ難けれど、樹間叢裡已に秋の聲あり。
- (ト) 自分は身中に健康の充ち溢れるのを覺えた。
- (チ) 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ。
- (リ) 月明かに星稀なり。
- (ヌ) 前車の覆るは、後車の戒なり。
- (ル) 花咲く春はいと樂し。
- (ヲ) 春來れば百花亂れ咲く。
- (ワ) 足音がするので犬が吠える。
- (カ) 北の山の雪が解け始める頃梅の蕾がそろ／＼ふくらんで來る。

二 句と節との區別を述べよ。

三 例をあげて句の種類を説明せよ。

構造上の種類

單文

文は構造上から左の三種に分類することがある。

一 單文

一 鳥啼く。

夏鳥

二 秋風衣を撲つ。

三 われ花を嵐山に観る。

四 涼しい風がそよくと吹いてゐる。(口)

右は主語と述語との關係が唯一回成立してゐる文であつて、かやうな文を單文といふ。

二 複文

一 春は來れども鶯鳴かず。

Hiroshima Shudo Middle

複文
重文

二 言ふことは易いが行ふことはむづかしい。
副詞句

三 景色の麗しきは天橋立なり。
名詞句

四 景色の麗しき天橋立は丹後國にあり。
形容詞句

右は一つ以上の句を含み、主語と述語との關係が二回以上成立してゐる文であつて、かやうな文を複文といふ。

三 重文

一 花咲き、鳥啼く。

二 病は口より入り、禍は口より出づ。

三 吉野山は花に宜しく、龍田川は紅葉に宜し。

右のやうに二つ以上の節から成る文を重文といふ。單文、複文、重文の三種に分かれるとはいふもの、時としては頗る複雑なものがある。今二三の例を次に示さう。

性質上の種類

- 一 氣霽れては風新柳の髪を梳り、氷消えては浪舊苔の鬚を洗(副詞句)
- ふ。(複文二つか
ら成る重文)
- 二 學問が出来るとからだ(副詞句)が弱いし、からだ(副詞句)が強いと學問が出来ない。(同上)
- 三 我が國には山紫に、水明なる佳景多し。(重文を含
む複文)
- 四 雨は降り、雷は鳴つても、あの人は平氣である。(同上)

第五章 文の性質上の種類

文は性質上から左の四種に分類することが出来る。

平敘文

一 平敘文

- 一 雨降り風吹く。
- 二 猛虎一聲山月高し。

疑問文

二 疑問文

- 三 山高く月小なり。
- 右の例のやうに、單に事實をありのままに敘述する文を平敘文といふ。
- 一 わが艦の敵に降れるものなきか。
- 二 雲の何處に月宿るらむ。
- 三 誰か最も賢き。
- 四 精神一到何事か成らざらむ。
- 五 これは何といふ花ですか。(口)
- 右の例のやうに、疑問の意をあらはすもの、或は反語の意をあらはす文を疑問文といふ。

命令文

三 命令文

命令文

感動文

- 一 よく學びよく遊べ。
- 二 明日午前八時出頭すべし。
- 三 無用のもの入るべからず。
- 四 主なしとて春な忘れそ。
- 五 早く著物を著なさい。

右の例のやうに、命令・禁止の意を表はす文を命令文といふ。命令文には普通、主語が省略される。

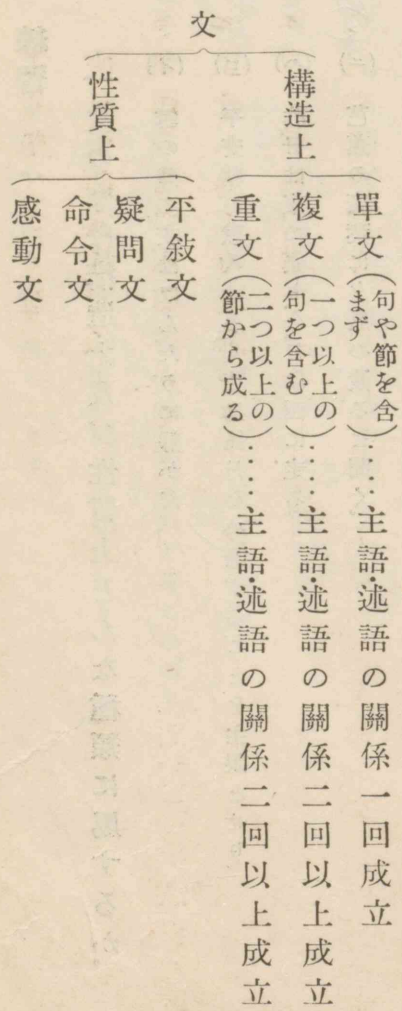
四 感動文

- 一 あはれ、この幾ひらこそまたも得難き形見なれや。
- 二 忠なるかな、楠氏。
- 三 あゝ、はななく、しくも果敢なかりし君が一生かな。
- 四 もうそんなになるのかなあ、卒業してから。

五 こればまあ、一體どうしたんでせう。(口)

右の例のやうに、感動の意を表はす文を感動文といふ。感動文には主成分の完備しないことが多く、又成分の倒置せられることが極めて多い。

右に説いたやうに、成分の倒置省略は文の性質に關することが多いものである。



練習四

練習

一次の文は構造上及び性質上どんな種類に属するか。

(イ) 雪の降る夜はほんたうに静かだ。

(ロ) 平安朝の歌人は多く花鳥風月を吟咏することを主眼とせり。

(ハ) 昨日は東に走り、今日は西に走る。

(ニ) 芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞く。

(ホ) 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。

(ヘ) 一旦事あらば吾人は身命を捧げて國家を防護すべし。

(ト) 英國は各自がその本分を盡くさんことを期待す。

(チ) 勝つことばかり知りて、負けることを知らざれば禍その身に至る。

(リ) 秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。

(ヌ) 年豊かなれば詣り謝し、天早すれば雨を乞ふ。

Handwritten notes at the top right of the page, including a large circle and various characters.

- (ラ) (ナ) (ネ) (ツ) (ソ) (タ) (ヨ) (カ) (ワ) (ヲ) (ル)

(ル) 堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。

(ヲ) 家陋なりといへども膝を容るべく、庭狭しといへども碧空を望むべし。

(ワ) 湊川は楠木正成の戦死せし所なり。

(カ) 人も學びて後にこそ誠の徳はあらはるれ。

(ヨ) 義は金鐵よりも堅く、死は鴻毛よりも輕し。

(タ) 月霜の如く地に沓え、風海の如く空に吼ゆ。

(ソ) 十五夜の月皎々として清き光を放ちぬ。

(ツ) 雪は野山を埋むとも老いたる馬ぞ道は知る。

(ネ) 山は高けれど限りあり、海は深けれどそこひあり。

(ナ) 花咲く春は楽しく、月澄む秋はあはれなり。

(ラ) 用があつたら、手を鳴らします。

Handwritten notes and corrections in the left margin, including a large circle around the word 'ヲ'.

Handwritten notes:
Hiroshima Middle School
Aizawa, Ara
Hiroshima

(ム) (ウ) (キ)

いつか夕暮の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色にくれて来た。大小さまざまの馬が元氣よくかけまはつてゐる様は實に勇ましい。たまたに散る落葉の音ががさりくと聞える。

正修 中學新文典 上級用 終

Handwritten: End

附録 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シシキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ(セ)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
例 手習サス。
周旋サス。
賣買サス。
- 六 (、セラル)トイフベキ場合ニ(、サル)ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七

「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八

佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九

てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇

疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一

てにをはノ「ト」ハ動詞使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二

てにをはノ「ト」ハ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其ノ徳ヲ稱ヘケルトゾ。

一三

語句ヲ列擧スル場合ニ用キル^ルてにをハノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四

上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをハノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五

てにをハノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

諸願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六

「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其ノ用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其ノ許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

【表二第】

表用活詞容形語口		表用活詞容形語文			
涼 清 シ	語 幹	種 類	活 用 の	語 幹	
				未 然	活 用
○	未 然	涼	清	シ	ク
ク	連 用	シ	ク	シ	ク
イ	終 止	シ	シ	シ	シ
イ	連 體	シ	キ	シ	キ
ケ レ	假 定	シ	ケ レ	シ	ケ レ

カ行變格	サ行變格
(來)	(爲)
コ	シセ
キ	シ
クル	スル
クル	スル
クレ	スレ
コイ	シロ

【表 一 第】

容形語文

種 活 類 用の	語 幹	未 然	連 用	終 止	連 體	已 然
-------------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

表用活詞動語口

サ行 變格	カ行 變格	下 一 段		上 一 段		四 段			種 活 類 用の	語 幹	未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
		(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書								
(爲)	(來)	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	
シセ ロヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ	語幹	未然	活	終止	連體	假定	命令	

表用活詞動語文

ラ行 變格	ナ行 變格	サ行 變格	カ行 變格	下 一 段	下 二 段	上 一 段	上 二 段	四 段	種 活 類 用の	語 幹	未 然	連 用	終 止	連 體	已 然	命 令
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	種 活 類 用の	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令

【表 二 第】

表用活詞容形語口		表用活詞容形語文	
涼 清 シ	語 幹	シク活用	ク活用
○	未然	涼	清
ク	連用	シク	ク
イ	終止	シク	ク
イ	連體	シ	シ
ケレ	假定	シキ	キ
		シケレ	ケレ
		種 類	活 用の 種 類
		語 幹	活 用の 種 類
		未 然	未 然
		連 用	連 用
		終 止	終 止
		連 體	連 體
		已 然	已 然

【表 一 第】

表用活詞動語口										表用活詞動語文										
サ行變格	カ行變格	下 一 段		上 一 段		四 段		種 類	活 用の 種 類	ラ行變格	ナ行變格	サ行變格	カ行變格	下 一 段	下 二 段	上 一 段	上 二 段	四 段	種 類	活 用の 種 類
(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書	語 幹	有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語 幹	
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未 然	ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未 然	
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連 用	リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連 用	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終 止	リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終 止	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連 體	ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	連 體	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	假 定	レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已 然	
シセ ロヨ	コイ	ケ ヨ	ネ ヨ	キ ヨ	キ ヨ	レ	ネ	ケ	命 令	レ	ネ	セ ヨ	コ ヨ	ケ ヨ	ネ ヨ	キ ヨ	キ ヨ	ケ	命 令	

【表 三 第】

表 用 活 詞 動 助 語 文

北 見	咏 嘆		指 定		打 消			推 量			時				崇使 敬役			可 能			崇受 敬身		助 動 詞 の 種 類	語	活 用 形									
	け り	な り	た り	な り	ま じ	じ	ざ り	ず	ら し	べ し	け む	ら む	む	き	け り	た り	ぬ	つ	し む	さ す	す	べ か り			べ し	ら る	る	ら る	る	未然	連用	終止	連體	已然
	○		ら	く	○	ら	ず	○	く	○	○	○	○	○	ら	な	て	め	せ	ら	く	れ	れ	未 然										
	○		り	く	○	り	ず	く	○	○	○	○	○	○	り	に	て	め	せ	り	く	れ	れ	連 用										
	り		り	じ	じ	り	ず	し	む	む	き	り	ぬ	つ	む	す	む	す	す	り	し	る	る	終 止										
	る		る	き	じ	る	ぬ	き	む	む	し	る	ぬ	つ	む	する	む	する	する	る	き	る	る	連 體										
○	れ		れ	けれ	じ	れ	ね	○	けれ	め	め	しか	れ	ぬ	つ	む	れ	す	れ	れ	けれ	る	る	已 然										
○	○		れ	○	○	れ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ね	て	よ	め	よ	○	○	○	○	命 令									

○括弧内のは現代文には殆ど用ひられない。
○線は語幹のままの形であることを表はす。

[表 六] [五 六] [等]

口語		口語		口語		口語	
られる	たい	らしい	だやう	られる	たい	らしい	だやう
(上下)			(でやう)				(あう)

[表 三 第]

口語		口語		口語		口語	
られる	たい	らしい	だやう	られる	たい	らしい	だやう
(上下)			(でやう)				(あう)

六 第

【表 五 第】

詞動助詞動語口

未然形に	れる(四段) られる(上下) せる(四段) させる(上下)
連用形に	たい た ます
終止形に	らしい まい(四段)
連體形に	だやう(でやうある) のだ(ある)
假定形に	

法續接詞動助詞動語文

未然形に	り(サ變に) まほし まし じ ざ ず む し さす す らる る
連用形に	たり(時) ぬ つ き(カサ變は活用) け け む た し
終止形に	べし ら む め ら し り ま じ べ か り な り(終止)
連體形に	なり ごとし
已然形に	り(四段活) る

ラ變に限り
づ連體形につ

なりは體言
にもつゞく。
如しは助詞
の、がにつ
づくこと
ある。

【表 七 第】

法續接のと詞容形・詞動と詞助續接語文

詞 容 形	詞 動	
とも ば	で ば	未 然
	つつ て	連 用
	とも と	終 止
に を が	に を が (とも) と	連 體
ども ど ば	ども ど ば	已 然

○括弧内ものは現代文にのみ用ひられるもの。

【表 六 第】

法續接詞動助詞動語口

まい (上下一段、カサ變格)	ぬ (ない)	よう (上下一段、カサ變格)	う (四段)	させる (上下一段、サ變格)	せる (四段)	られる (上下一段、サ變格)	れる (四段)	未然形に
						たい	た	ます
						らしい	まい (四段)	
						だやう (でやう、あやう)	のだ (あので)	
								假定形に

法續

り (サ變に、限る)	まほし	まし	じ	ざり
ラ變に限り、づく				
なりは體言にもついで、如しは助詞、あづくこと、ある。				

文部省檢定濟

昭和拾貳年拾月壹日 中學國語漢文教科用

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座(東京)二六四四番
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座(大阪)四七一一番

東京修文館
大阪修文館



昭和十年八月二十五日 印刷
昭和十年七月七日 發行
昭和十年十二月十二日 再版發行

著者

吉澤義則
京都市左京區修學院西沮澤町四

印刷者兼

鈴木政雄
東京市神田區神保町一丁目二十五番地

發行者

鈴木常松
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

正修中學新文典 上級用

定價金四拾八錢

修持

大日本中国地方 廣島縣 廣島市 南平町

修道中學校

修中三四

岩崎武人

修中辛酉
岩崎武人

広島大学図書

2000041359



蔵書

35

359

我が希望

四二七

岩崎武人

我等は誰しも希望を持たぬ人はあるまい。年取つた老人は時
 別で或るが。この世にある生物は大小の差はあらうとも希
 望を有つてゐる様だ。これを草木に例を取つて見ると草木も
 小さな種から小さな芽を出す。この小さな若芽も日光や水や
 お陰で次第に大きくなつた。時がたつて花を開き遂に實
 を結びこれを生人に與へ又は生存の元となるべき種子を作す。
 これを見ると草木も實を結ばんとの希望を有してゐる如く思
 へる。又小さな子供でも忍は大きくなつて何になるのかと尋
 ねると男の子なら兵隊さんか或は大臣とか何とか大きな事

文稿

修道

中學校 校

と言つてゐるのを見ると子供たりとも希望はあると見える
 のだ。

しかしこの希望はだんごと變つてゆくものだ。こればかり
 に自分に例を取つて見よう。自分も子供の時は陸軍大將と
 か海軍大將とか大きな希望をもつてゐた。しかし少し服がも
 痛くなるとこんなに弱つてはそやんな者にはなれぬぞとい
 希望を變へる。しかしこれでは又一定しない。人が良い話
 をしてゐるのを聞くと又人の有つてゐる違つた希望を持つ。
 かように自分の希望も次々と變つてゐた。或る人の話にも
 希望もといふものは大きくなるにつれて變つて行くものだと

言はれたのを覚えてゐる。しかし誰も大きな希望を有つのに
 は相違はない。僕も小さい時から大望を持つてゐた。先生のお

我が希望

四二七

岩崎武人

我等は誰しも希望を持たぬ人はあるまい。年取つた老人は特
 別で、あるが。この世にある生物は大小の差はあろうとも希
 望を有つてゐる様だ。これを草木に例を取つて見ると、草木も
 小さな種から小さな芽を出す。この小さな若芽も日光や水や
 お陰で次第に大きくなれる。時がたつにつれて花を開き、遂に實
 を結び、これを人に與へ、又は生存の元となるべき種子を作す。
 これを見るに、草木も實を結ばんとの希望を有してゐる如く思
 へる。又小さな子供でも、忍は大きくなつて何になるのかと尋
 ねると、男の子なら兵隊さん、或は大臣とか何とか大きな事
 を言つてゐるのを、正見ると子供たりとも希望はあると見える
 のだ。

文稿

修道

中學校 學校

しかしこの希望はだんごと變つてゆくものだ。とれをかり
 に自分に例を取つて見よう。自分も子供の時は、陸軍大將と
 か、海軍大將とか大きな希望をもつてゐた。しかし少し服がも
 痛くなると、こんなに弱い体では、そやんな者にはなれぬぞ、こ
 希望を變へる。しかしこれでは又一定しない。人が良い話
 をしてゐるのを聞くと、又人の有つてゐる違つた希望を持つ。
 かように、自分の希望も次々と變つてゐた。或は人の話にも
 希望もといふものは、大きくなるにつれて變つて行くものだと

言はれたのを覚えてゐる。しかし誰も大きな希望を有つのに
 は相違はない。僕も小さい時から大望を持つてゐた。先生のお
 別れの式の時に、僕も大望をもつてゐる、お、吾等は大きな希望を有た
 う。そうして、この大望は何一つ心に根付かぬ、しよ、う、は、な、い、か。